令和４年度

中学生の主張
東京都大会
発表文集

中学生の主張東京都大会HP

※発表文集の電子版・
大会当日の動画を
公開しています。

東京都

発表

令和4年度 中学生の主張東京都大会

開　会

発表者紹介

表 彰 式

知事賞受賞者インタビュー

受賞おめでとうございます

目　次

1　開会あいさつ　東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長　米今俊信……3

2　発表者及び各賞

知事賞

・理解のある未来を信じて　大田区立大森第八中学校　三年　向井琴羽……4

東京都教育委員会賞〔氏名五十音順〕

・欲望と幸せ　東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年　辻谷和香奈……5

・あなたのそばに　東京学芸大学附属世田谷中学校　三年　戸田幹子……6

優良賞〔氏名五十音順〕

・見えない壁を越えて　東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年　吾妻真希……7

・壁をなくす　立川市立立川第二中学校　三年　片山菜緒……8

・実店舗とネット通販　國學院大學久我山中学校　三年　金子智春……9

・買い物難民　東京電機大学中学校　二年　鈴木月菜……10

・キャッサバ　立正大学付属立正中学校　一年　ソン楽人……11

・チャレンジド　中村中学校　一年　中嶋乃菜……12

・優しさの輪　東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年　藤田紗帆……13

奨励賞〔氏名五十音順〕

・命をつなぐ献血　東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年　大宮夏奏……14
・決めることと後悔　東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年　柿澤咲希……15
・一瞬の出会い　東京都立桜修館中等教育学校　三年　亀岡華奈……16
・アンコンシャス・バイアス　國學院大學久我山中学校　三年　斉藤周……17
・真の平和の祭典を目指して　葛飾区立大道中学校　一年　高橋真那人……18
・唯一の被爆国　サレジアン国際学園中学校　三年　谷本愛実……19
・本当の友達　國學院大學久我山中学校　三年　古宮侑季……20
・SNS時代を生きる僕ら　國學院大學久我山中学校　三年　松本優太……21
・一人ひとりが輝ける社会へ　東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年　村田愛実……22
・自閉症について知ってほしい　葛飾区立水元中学校　一年　山田りる……23

3　審査員長講評　十文字学園女子大学教授　冨山哲也……24
4　最終審査員の感想……25
5　令和4年度　中学生の主張東京都大会　当日の概要……27
6　【参考】令和4年度　中学生の主張東京都大会　募集概要……28
7　応募状況……29
8　過去の入賞者（直近三年間）……30
9　令和4年度　中学生の主張東京都大会　動画配信について……31

（※掲載作品については、誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。）

開会あいさつ

東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長

米今 俊信

東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長の米今でございます。皆様方には、「中学生の主張東京都大会」に御出席賜りまして、厚く御礼申し上げます。

この「中学生の主張東京都大会」は、都内の中学生からの作文を募集し、発表する機会を設けることで、中学生が、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付ける契機とする、ことを目的としています。また、今日の発表を経て決定する、最優秀賞である知事賞受賞者は、国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会」の東京都代表として推薦されます。

この大会は、昭和五十四年から開催し、今回で四十四回目を迎えます。第一回からこれまでに約九万人を超える中学生が参加しています。今年度の応募作品数は、五、六四七点でした。今日はその中から、事前審査で選ばれた一〇名が発表を行います。一〇名の皆さんには、これまでの準備の成果を発揮し、思いのあふれるすばらしいスピーチとなることを期待しています。

今年も、中学生の皆さんからは、平和や人権、多様性の尊重などの社会課題のみならず、地域や学校での出来事や個人的な体験から自己の成長を実感した内容など、幅広いテーマについて、考えや思いを作文にして寄せていただきました。中学生の皆さんには、これからも生活体験を元に、広い視野と柔軟な発想をもって自己や社会と向き合いながら、未来の東京、未来の日本、未来の世界を切り拓いていってほしいと願っています。

結びに、本大会の開催にあたり、審査員の皆様、学校関係の方々をはじめ多くの皆様に多大な御支援をいただきましたことに感謝申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

知事賞

大田区立大森第八中学校　三年
向井琴羽

理解のある未来を信じて

「きもっ」

町を歩いていた時のことです。私の隣で、一人の男の子は言いました。その言葉は目の前にいるゲイカップルに向け、はかれた言葉でした。

ＬＧＢＴ。この言葉に興味を持ったのは、一年前の春頃でした。私の大好きなユーチューバーの方が、同性の方とお付き合いをしているという報告動画をアップロードしたのです。その日から私はＬＧＢＴについて調べるようになりました。ＬＧＢＴの知識がつく中で私の目に留まったのは、ＬＧＢＴについての誹謗中傷でした。「キモい」「理解できない」「不自然だ」など、数々の悪意にまみれた言葉がインターネット上に書きこまれていました。私はそれを見て、言葉が出ませんでした。ＬＧＢＴに該当している人達は、みんな自分の性と向き合い、やっとの思いで自分の性のあり方について答えを出したのです。その努力の結晶がその人の性なのです。それのどこが気持ち悪いのですか？同性を好きになる。それのどこが不自然ですか？愛の形は様々です。二十歳年上を好きになる人もいれば、同性を好きになる人もいます。人の性を、心を傷つけることは、その人の存在を、あり方を否定するのと一緒です。それがどれほどつらく、悲しいことか、改めて考え、実感するべきだと私は思います。

また、電通ダイバーシティラボのアンケート調査によると、ＬＧＢＴに該当する人は、二〇一二年は五・二パーセント、二〇一五年は七・六パーセント、二〇一八年は八・九パーセントと年々増えています。では、なぜ増加傾向にあるのでしょうか。一つの要因に、人々のＬＧＢＴに対する理解が深まってきたということがあてはまると思います。最近では、ガールズラブ、ボーイズラブなどの漫画が増えており、腐女子、腐男子などと呼ばれる人達も増えています。ですが、まだまだ理解が足りていないのも現状です。他人からの心ない言葉は人を殺します。理解がない人達が性の多様性を批判し、侮辱し、人一人の尊い命をうばう原因を創りあげているのです。

先程の男の子はなぜキモいと言ったのでしょうか。原因は学校などで考えを深め、意見を交換する機会が少なかったこと、彼の家族や友人も批判的な考えを持っていたため、正しい理解を伝える人がいなかったことにあると思います。こういった問題を解決するにはＬＧＢＴに理解を求める人々が、積極的に声を上げる必要があります。自分自身の言葉で伝えることが、その人自身の理解が生まれるきっかけになるでしょう。

私はまだ気づいていないだけで、ＬＧＢＴに該当するのかもしれません。それはみなさんも一緒です。決して他人事ではなく、誰しもに起こり得ることです。今、皆さんの身近にある事実です。

私はみなさんに、少しでもＬＧＢＴの現状を知ってほしいのです。どれだけの人が言葉によって傷つけられ、否定され、涙を流してきたことか。想像するだけで胸が痛みます。その人の性のあり方を否定しないでほしい。私が今、この話を通して伝えたいことはそれだけです。一人一人が心がけるだけで、現状を変える大きな力になることを知っています。そして、みなさんが、その第一歩を踏み出してくれることを信じています。

今、性の悩みを抱えている人へ。私はあなたの性を認めます。決して否定しません。そして私のような考えを持つ人はあなたの側にいます。一人で抱えこまず、誰かに話してみてください。家族でも、友達でも。インターネットや電話を利用する方法もあります。どうかあなたに向けられた言葉の脅威に負けないでください。理解のある未来を信じて。私はあなたを応援しています。

審査員長のコメント

ＬＧＢＴで悩みを抱えている人に向けて、「理解者がいる」という強いメッセージを送るとともに、社会全体の価値観の転換も求めていました。資料の引用などで問題点も明確になり、力強い主張になっていたことが印象的でした。

東京都教育委員会賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年
辻谷和香奈

欲望と幸せ

私は小学六年生から中学一年生の間、摂食障害を患った。過度なダイエットをしてしまう病気だ。小学校高学年になり、もともと周りの子よりも体格が良かった私は、自分の体型を気にするようになっていた。その気持ちに拍車をかけたのは、クラスメイトがすれ違った上級生を見てこっそりと言った、「あの人太ってるよね。」という言葉だった。私もそう思われているかもしれない。その不安が大きくなり、それからは食べる量がだんだんと少なくなっていった。始めはおやつを控える程度だった。だが、もっと痩せたいという欲望が強くなり、三食もしっかりとは食べなくなった。カロリーが低い野菜ばかり食べ、炭水化物はほぼ食べなかった。このような生活をして変化したのは体重だけではない。心の状態がひどく悪化した。「もっと食べなさい。」と家族に言われる度に喧嘩して、生きていることさえ苦痛に感じられた。また、自分だけでなく他の人の食べる量や体型も気になり、頻繁に比べるようになった。人より食べる量が多いと落ち着かなくなった。このままではいけない。そう分かってはいたが、一度間違った方向に曲がった思考を正常に戻すことは難しい。結局、一年以上その生活から抜け出すことはできなかった。

美しい体型を手に入れるのが目的だったはずなのに、何が私を心身のどん底に追いやったのか。それは、体重が少しでも増えることは悪いことだという固定概念や、そこから来る不安、痩せたいという強い願望などだと思う。幸い、私は家族や学校のおかげで自分の過ちを受け止め、健康な心と身体を取り戻すことができた。だが、止めてしまった成長期を取り戻すことはできず、背は思うように伸びていない。あの頃あんなことをしなければ、と後悔している。

この経験を通して私が伝えたいことは、摂食障害だけに関することではない。人間の欲望や不安、周囲の言動などは、大きな行動意欲や対抗意識を掻き立て、本来の目的を見失わせると共に、自分を追い詰めてしまう可能性があるということだ。それが国レベルになれば、世界平和や地球環境を脅かすことになる。他国からの侵攻を恐れて核兵器を保有し続け、利益を増やしたいがために自然を破壊して開発を進める。これらはその良い例だろう。私が自分自身のせいで何より大切な健康を失い、取り戻すのにかなりの時間を必要としたのと同じように、欲望のままにやってしまったことはなかなか取り返しがつかない。だから、どれだけ強い感情に襲われても、越えてはならない境界線を見極める必要がある。その線を越えた先に広がっている世界は、思い描いていた理想からは遠くかけ離れ、むしろ不幸と激しい後悔で満たされているだろう。自分や世界の未来を守るためには、目先の欲望や不安に取りつかれてはならない。長い見通しを持って、適切な判断をする必要がある。時には、誤った決断をしそうになるかもしれない。そのときは、周りの人たちがはっきりと意見を述べて、より良い方向へと導いていくことが大切だ。人間は、賢い頭脳を持っている。だが、その頭脳を乱用し、欲望のままに生きている。それが原因で様々な問題が起きているのは明らかだ。人間に足りないのは、自分たちを律する強い意志なのではないだろうか。現在、社会問題に対する関心が高まっている。だが、問題が起きてから気付くのではかなり遅いのだ。だから私は、将来、これ以上人間が欲望や不安に支配されたまま暴走して新たな問題を生み出さないように、政策に関わる仕事をしたいと思っている。そして、この今の社会を少しでも変えることが私の夢だ。自分にとって、または世界にとって本当の幸せとは何なのか、一人一人がよく考え、正しい行動を判断できる世の中になってほしい。

審査員長のコメント

自身の摂食障害の辛い経験を振り返り、人間の欲望や不安、周囲の言動が、個人だけでなく、社会全体の過ちにつながる懸念がある、という大事な指摘をしています。経験の辛さがリアルに表現されていて、胸に迫るものがありました。

東京都教育委員会賞

東京学芸大学附属世田谷中学校　三年
戸田幹子

あなたのそばに

「どうして誰も私の苦しみに気づいてくれないの？」クラスメイト達との間にある見えない壁、みんなの中に座る一人ぼっちの私。過去を振り返ると、寂しい顔をしたあの頃の小さな自分がいる。

小学校五年生の頃、浜松から東京に転校をした。新しいクラスで友達はできるかな、と期待に胸をふくらませて春休みを過ごしていた。ついにやってきた転校初日、新しいクラスに入った。新しいクラスメイト達は遠巻きに私を見つめるだけで、誰も話しかけてはこなかった。転校して何日か経っても馴染むことはできなかった。話しかけても無視をされたり、心ない言葉をかけられたりもした。「浜松に帰れよ。」という言葉には深く傷ついた。帰ることができるのなら帰りたかった。悲しみや悔しさを胸に押し殺して通い続けた二年間が過ぎて、小学校を卒業した。卒業までずっと、「学校には誰も味方がいない。私は一人ぼっちだ。」と思っていた。

中学校に入学した。もう小学校の頃のような思いはしたくなかった。担任の先生は度々「何か困ったことはない？」と聞いてくださった。今の私には味方がいるのだと気づき、不安が消えた。寄り添ってくれる人がいることで勇気が湧き、自分のしたいことをしようと決めた。憧れだった生徒会に入り、三回の選挙を経て念願の生徒会長になった。私は今、たくさんの生徒が癒される場をつくるために、中庭の花壇に花を植える活動をしている。花壇の花に水をあげていると、「花壇の手入れ、お疲れ様！」と、大声で呼びかけてくれる友達、「生徒会、応援しています。頑張ってください！」と、笑顔で話しかけてくれる後輩、「お花に癒されているよ。いつもありがとう。」と、声をかけてくださる先生。どこかで誰かが私を優しく見守ってくれていると思うと、心があたたかくなる。たくさんの大好きな友達や信頼できる先生に恵まれて私は今幸せだ。……苦しんでいたあの頃、私は本当に「一人ぼっち」だったのだろうか。どこかで誰かが私のことを見守ってくれていたのではないか。

転校当初、私にも一人の本当の友達ができた。ある日、その友達は「寂しそうな顔をしているけれど、大丈夫？」と私に言った。私は友達に自分の弱みを見せたくないと思ってしまい、強がって何も言葉を返さなかった。また、六年生のときの担任の先生は私に「本当はあなたは強い子なんだよ。」とおっしゃった。そのときは私の何がわかるのか、と思ってしまったが、本当は見えない何かと戦っていた私のことをよく見てくださっていた。あのとき、素直に心を開いて二人に相談していれば、かつての自分の孤独な気持ちは救われていたのかもしれない。あの頃、私は学校で「一人ぼっち」なんかではなかった。隣で私のことを心配して見てくれていた友達、優しく見守ってくださった先生が本当は近くにいたのだから。

今の私は誰よりも「一人ぼっち」だと感じている人の気持ちがわかる。今度は自分が誰かに寄り添い、見守る側になりたい。私の夢は生徒会長として、生徒全員が安心して楽しく通えるような、優しさと幸せにあふれた学校にすることだ。生徒会では生徒に寄り添い、学校生活の悩みを聞くための相談箱の設置にも取り組んでいる。かつての私のような思いをしている生徒を救いたい。私の周りにも、本当は寂しくて苦しいのに声を出せず、周りの人にわかってもらえていない友達がいるかもしれない。そんな友達に私は一番に手を差し伸べて伝えたい。「あなたの苦しみに気づいてくれる人は必ず近くにいる。私はあなたの味方だから。」そして、人知れず心に苦しさや悲しみを抱えている全ての人に伝えたい。「あなたは一人じゃないよ。あなたを見守ってくれている人はきっとそばにいるから。」

審査員長のコメント

小学校時代、転校によって感じた孤独感を振り返りつつ、私に寄り添ってくれていたかもしれない人に思いを馳せていました。そして今、自分が誰かの力になりたいと考えています。そうした心情の変化を大変表現豊かに伝えていました。

優良賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年
吾妻 真希

見えない壁を越えて

言葉は人を表す。なぜなら人は経験したことからしか言葉は出てこないからだ。言葉は話し手がどこで生まれ、どこで育ち、だれと過ごし、何を感じてきたのかを映す鏡のようなものだ。それは言葉選びに限ったことではなく、方言や言語の種類も含めて、言葉は話す人を投影するのだと思う。しかし、言葉だけでその人の内面を判断し、その人が何者なのかを決めつけてしまうのは、相手や自分の人生を閉鎖的にすることに繋がりかねない。確かに言葉は人格を反映するが、その人の側面の一部に過ぎない。しかし、現代社会は言葉の表面だけで人を評価する排他的な世の中になってしまっていると感じる。

小学二年生の夏、私はチャリティーコンサートのボランティア活動に参加するためにマレーシアに行った。この活動は世界の恵まれない環境に生きる子供たちが芸術を通じて自己表現方法を学び、国境を越えて交流する機会を提供するものだ。マレーシアには一週間滞在したのだが、初日は緊張と不安でいっぱいだった。当時小学二年生だった私は英語はほとんど理解できず、簡単な挨拶程度しか話すことができなかった。そのような状況で、初めて会う、言葉の通じない人々と協力して活動をすることは困難だろうと思っていたのだ。しかし、ボランティア参加者は積極的に私に話しかけてくれ、互いに心地良いコミュニケーションをとることができた。最初は言葉で思いを伝えられないことに戸惑いを感じたが、相手をよく観察するうちに、相手が今どのような気持ちなのかを理解することができるようになった。私は国境や言葉の違いを越えた強い繋がりを感じた。言葉は通じなくても芸術や笑顔は世界共通である。私はそのことを身をもって学ぶことができた。以前の私は言葉が通じない相手のことを理解してコミュニケーションをとることは不可能であろうと考えていた。しかし、このボランティア活動を通して言葉にしないからこそ、見えてくるものや発信できるものがあることを知った。表情や身振り手振りでの拙い会話からでも、深く相手を見つめれば共有できるものがある。国も言葉も違う仲間との言葉のない会話は、ゼロから相手を知ろうとする姿勢の大切さを教えてくれた。

私たちは気付かないうちにステレオタイプにとらわれた思考をしてしまっていると思う。無意識のうちに固定観念の壁を築き上げ、その先にある心の声が聞こえなくなってしまっている。そのような思考のもとに犠牲になっている人たちが少なからずいるだろう。情報社会といわれる今の時代、世界はこれまでにないほど強く繋がっている。しかし、人間的な側面では、人々は繋がりきれていないように感じる。私は文化や言語の違いによって排他的になってしまう人たちを何度も見聞きしてきた。様々な情報であふれている現代だからこそ「ゼロから相手と向き合う」ことが更に難しくなっているのかもしれない。

無意識の中にある先入観を取り去ることはとても難しいことだ。それでも私たちが変わっていかなければ、より融和的な社会を創造していくことはできないだろう。そのためには何ができるのか。まずは触れることだと私は思う。七年前、私は様々な多様性を持つ人々と触れて、世界の広さ、そして自分の視野の狭さを実感した。あの経験から、人と人との繋がりは言葉にできるものだけが全てではないことを学んだ。見える言葉にとらわれずその奥にあるものに気付けること。それを共有できること。これから私たちが前に進んでいくたびに、それらのことを大切にできているかどうか、一歩立ち止まって振り返っていきたい。

審査員長のコメント

言葉の大切さを踏まえつつも、言葉を越えて理解する＝「ゼロから相手と向き合う」ことの必要性を、体験をとおして丁寧に論じられていました。発表の際は、会場全体に目配りがされていて、大変迫力があり印象的でした。

優良賞

立川市立立川第二中学校　三年

片山菜緒

壁をなくす

私の所属するバレーボール部では先日、ろう学校との練習試合が行われました。その日は、ろう学校のメンバー不足だったため、私はろう学校と私たちの中学校の合同チームとして練習試合に参加しました。バレーボールは団体競技であるため、普段は声を互いにかけ合ってプレイをします。しかし、ろう学校のメンバーは耳が不自由であるため、私はどのようにコミュニケーションをとればいいのか分からず不安でした。練習試合が始まり、私は早速ミスをしてしまいました。すると、ろう学校のメンバーが「大丈夫」という意味でハイタッチをしてくれたのです。普段と形は違うけど、こうしてコミュニケーションをとれたことは、私にとってとても嬉しかったです。私は試合中にろう学校のメンバーとの間に「壁」を感じることは全くありませんでした。

しかし、私が普段生活している街中では「障害のある人」と「障害のない人」との間に「壁」があるように感じられることがあります。例えば、障害のある人を街で見かけたとき、周りの人がその人をちらちら見ているような光景を何度か見たことがあります。周りの人は悪意があるわけではないと思います。しかし、障害のある人からすれば、「自分は他の人とは違うんだ」と感じてしまうかもしれません。では、障害のある人と障害のない人が共生できる社会を築くにはどうすれば良いのでしょうか。私には二つの考えがあります。

一つ目は「知る」ことです。相手のことを知ることは互いの距離を縮め、「壁」をなくすことができると思います。実際、私の母が働いている職場には耳の不自由な方がいるそうです。母はその人とコミュニケーションをとるために、家で簡単な手話を練習していました。最近では、その人から簡単な手話を教えてもらうこともあるそうです。このように、相手を知ることは相互理解にもつながるのです。

二つ目は「助ける」ことです。車いすの方は少しの段差でも越えることが困難です。また、目の不自由な方は点字ブロックだけを頼りに道を進まなければなりません。私たちにとって普段の生活をおくることは簡単でも、障害のある人にとって普段の生活をおくることは大変なことなのです。では、私たちにはどのようなことができるのでしょうか。例えば、電車で松葉杖を持っていたり義足を履いていたりする人を見かけたら席を譲るなど、身近なところから助けることはできると思います。また、直接関わらなくても点字ブロックの上に物を置かない、階段がある場合はエレベーターの利用は控えるなどの行動も障害のある人を助けることにつながります。こうした「助ける」という行動は障害のある人と関わりあう中で、「壁」をなくすきっかけとなるのではないでしょうか。

東京でのパラリンピックの開催が決まったころから、ユニバーサルデザインやバリアフリーといった言葉が広まるなど、社会全体では障害のある人への理解が深まったように感じます。しかし、裏では障害者差別などが絶えないことも事実です。私たち一人一人の行動が共生社会を築くための近道となるのかもしれません。

審査員長のコメント

共生社会をいっそう前へ進めるための方策として、知ることと助けることが重要であるという提言をされていました。「私たち一人一人の行動が共生社会を築くための近道になる」という言葉が印象的でした。落ち着いたトーンで、心に染みわたる発表でした。

優良賞

國學院大學久我山中学校　三年
金子智春

実店舗とネット通販

私の住んでいる町には、活気のある商店がある。今、町では多くの店が撤退しては、新たな別の店舗に入れ替わる、変化の激しい状態である。そんな中、この商店は、何十年もの間、客足が途絶えることがない。

この店が扱っている商品はおでん種である。何十種類ものおでん種の中から自分の好きなものを選んで買うスタイルだ。昔ながらのさつま揚げから、チーズやソーセージの入った新種のものまで揃っている。茹でた大根やしらたきを買って帰れば、たちまちおでんの出来上がりである。少しだけ買うつもりでも、目移りしてつい沢山買ってしまう。しかし、今やおでんはスーパーやコンビニエンスストアでも買うことができる。なぜこの商店は長年に渡り活気があり続けるのか。ネット通販が盛んな時代でも生き残ることができるのは、どんな店なのだろうか。

まず、実店舗で生き残るお店の良さとは何か。一つには、買い物の高揚感を味わうことが出来るということだ。目の前にある沢山の商品の中から好みの商品を選ぶ楽しさがある。だから、買うつもりのなかった商品まで、つい買ってしまう。そんな予期しない喜びがある。

また、対話を楽しむことができる良さもある。やりとりしながらどんな商品が自分には合うのか、おすすめの商品はなにか、その場での店員さんとの会話から生まれる新たな発見がある。

更に、これは特に食品においてだが、鮮度の高い商品を購入できることも良さの一つである。売り場のすぐ後ろで、新たな商品が、次々と作り出されている。音や匂いが味への期待感を高めてくれる。また、鮮度は商品だけではない。消費者の今すぐに欲しいという気持ちの鮮度も素早く満たすことができる。

したがって、これらの魅力がなければ、客は実際に足を運んで買おうと思わなくなるのではないか。単に商品を購入するだけならば、ネット通販に置き換えられてしまう。そのようにして実店舗が淘汰されていくということは想像に難くない。

たしかに、ネット通販は便利だ。家に居ながらにして、好きな時に買い物をすることができる。沢山の商品の中から、口コミの評判を確認したり、品質や値段を比較したりしながら、納得がいくまで時間をかけて選ぶことができる。お店の人に遠慮する必要はない。そのうえ、買ったものを自宅まで届けてもらえるのだ。ネット通販は客のわがままにどこまでも応えてくれる。

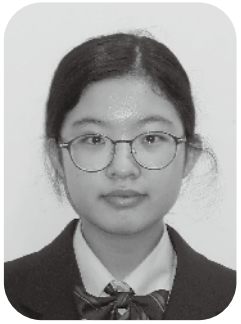
しかし、便利な通販にはない魅力が実店舗にはあるはずだ。インターネット上の商品画像を吟味して、納得して注文したはずなのに、実際に届いた商品を見て失望することがある。所詮は二次元の画像だ。不足している情報を期待感が補っている。商品の価値を、心が高く見積もり過ぎたのだ。それに比べると、実際に手に取ることができる実店舗の情報量は多い。過剰な妄想が入り込む隙はない。百聞は一見に如かずとはこのことである。リアルなコミュニケーションによって、店主のおすすめを聞き、商品の鮮度を実感しながら買い物をするという体験こそが、実店舗の魅力なのだ。

インターネット全盛の現代においても、魅力ある実店舗は生き残っていくことが可能である。今は少し元気のないように見える私の住む町が、いつまでも多くの人の住みたい町であり続けるためには、人々を家の中から誘い出すような、魅力ある実店舗の充実が不可欠である。

審査員長のコメント

ネット通販が全盛の中で生き残る実店舗の特徴とは何だろうか、ということを分析し、リアルなコミュニケーションがもたらす社会の活力の大切さを訴えていました。具体的な描写や上手な比喩などがあり、表現力が豊かで印象的でした。

優良賞



東京電機大学中学校　二年
鈴木月菜

買い物難民

皆さんは、「買い物難民」という言葉を知っていますか？「何それ、初めて聞いた！」という人が多いと思います。私は、小学生で社会問題について調べた時に、初めて「買い物難民」という言葉を知りました。買い物難民とは、色々な理由によって食料や必要なものを買えなくなってしまう人のことを指します。ものだけではなく、サービスを受けられなくなることも含まれるそうです。買い物難民は、金銭的な理由ではない他の理由で増加していることが経済産業省の報告書によりわかりました。農村部だけではなく、都市部でも、買い物難民は増加しているそうです。

ではなぜ、都市部でも買い物難民が増加しているのでしょうか？考えられる理由は、主に二つあります。それは、「住民の高齢化」と、「商店街の廃業」です。住民の高齢化と聞くと、「え、それじゃあ、農村部の増加理由じゃん！」と思ったそこのあなた！それは違います。都市部でも高齢化は進んでいます。高齢者は、いつの間にか体力が少なくなっていて、歩くことや自転車を漕ぐことができなくなっていたり、判断力が弱まり、息子や娘に免許返納を促され、免許を返納し、車での移動が不可能になっていたりすることで、大都市に住んでいても、自由に行動できない人が、たくさんいるのです。それに加え、最近「激安スーパー！」とか、「ホームセンター」とか、見かけたりしませんか？それが、買い物難民を増やしている原因です。大型スーパーが進出してきて、街のスーパーなどが、売り上げの減少により、閉店し、団地やアパートに一人暮らしをしている高齢者が大型スーパーに行けなくなってしまう現状があるようです。

このように、少子高齢化の絡んだ社会問題をどう乗り越えていくのか案を考えてみました。それは、市区町村と協力して、宅配サービスを提案するというものです。市区町村は事前に身寄りのない高齢者や移動が困難になっている人などを調べて宅配サービスをお勧めします。宅配サービスは国が推奨しているドローンではなく、対象者と同じ人が直接おうちに配達するというものです。人と会話したり、生活を見守ったりすることができるという利点があります。

この案を実現するために、私にできることはないか、考えてみました。それは、周りに困っている人が居たら、勇気を出して、声をかけてみて、お手伝いをすることだと思います。「でも、逆ギレされたら怖い…。」そう思うかもしれません。ですが、困っているときに助けを求める方が怖くないですか？困っているときに話しかけてもらい、それを解決してくれれば、困っていた人も、話しかけた人も、気分がスッキリしたり、困っている人が周りに助けを求めやすくなったり、話しかける人の緊張が半減したりします。このように、「思いやり循環」をつくることによって、買い物難民ではなく、ほかの社会問題も、少しずつ解消していけるのではないのでしょうか？皆さんも、少しでも社会問題を解消できるように、「思いやり循環」を広めて、暮らしやすい環境にしていきましょう。ありがとうございました。

審査員長のコメント

全国的に問題になっている買い物難民に着目し、それが生まれる社会的な背景や解決のための方策について考察しています。その上で、自分から「思いやり循環」をつくりたいと決意を述べています。聞き手への問いかけを上手に交えた発表でした。

優良賞

立正大学付属立正中学校　一年
ソン 楽人

キャッサバ

ぼくの将来の夢は、コートジボワールで農業や養鶏の仕事をすることです。なぜコートジボワールかというと、ぼくの父の生まれた国だからです。

農業に関わる仕事をしたいと思ったのは、小学校六年生の時です。ぼくが通っていた小学校は、サイエンス日記という宿題があって、毎週提出していました。サイエンス日記に書くネタを探すのが毎週とても大変だったので、母が農園を借りてくれました。農園でいろいろな野菜を育て、観察したことを日記に書きました。野菜を育てるのは宿題のためだったのに、野菜を育てることが思ったよりもスゴクスゴク楽しくて、将来は農園の仕事をやりたいと思いました。

コートジボワールでまず最初に育てようと思っているのは、キャッサバです。キャッサバとは多年生植物で根にはサツマイモのようなイモができます。なぜキャッサバなのか？理由は二つあります。一つ目の理由はキャッサバを育てるのが簡単だからです。二つ目の理由はキャッサバには捨てるところがないお得な植物だからです。

キャッサバは他の植物なら育たない環境でも一ヘクタールあたり十五トンも収穫できるそうです。全ての条件が整い、ちゃんと育てれば一ヘクタールあたり百トンも収穫できるとの研究成果があるそうです。キャッサバは種ではなく茎を二十五センチくらいの長さに切って、地中に挿すだけで根が出てきて、芽も出てきます。雨季の前に苗木を畑に植えます。苗木を植えて一年後には収穫できます。収穫までの間、草むしりくらいで、ほぼ何もしなくていいそうです。

キャッサバは、そのほぼ全ての部位が利用可能な多目的、多機能作物です。キャッサバの葉は生食したら牛でも死んでしまうそうです。ですが葉には、カルシウム、ビタミン、タンパク質が多く含まれていて天日干しなどの方法で毒を抜き、食用や家畜用飼料に使われています。キャッサバの茎は挿し木の苗にします。キャッサバのイモは、コートジボワールでは主食として食べられているそうです。イモから製造したでんぷんは「タピオカ」と呼ばれます。タピオカ粉は日本でもラムネや冷凍うどんなどにも使われています。イモは食べるだけでなく家畜飼料やエタノール原料にもなるそうです。

来年、リモートでキャッサバ栽培を始めます。畑の広さは、千八百平方メートルです。一トンぐらい収穫できたらいいなと思います。

将来の夢の実現のために、フランス語を話せるようにして、農業か経営の大学に行きたいです。なぜ経営の大学に行きたいのか？それは、小学校六年生の時の担任の先生に「農業をするなら、経営の勉強もした方がいいよ」と言われたからです。

大学に行くために、学校の勉強を頑張りたいと思います。まずは英語の勉強を頑張って、中学生の間に英語検定二級を取って、フランス語の勉強を始めようと思っています。経営の勉強には、数学が出来ないといけないと聞いたので数学の勉強も頑張りたいです。高校生の間に数学検定一級を取れるようにしたいです。

アフリカは将来、人口が増えて食糧危機になると言われているそうです。今のコートジボワールの食べ物は外国からの輸入に頼っていて、小麦粉が値上がりしてパンがすごく高くなっているそうです。外国からの輸入しているものは、外国では売れないような食べ物が多いので、ぼくはコートジボワールで安全な食べ物を販売したいと思っています。

審査員長のコメント

野菜を栽培した体験からキャッサバに興味を持ち、自然や生活と関連づけながら、農業に従事したいという自身の未来像が描かれていました。会場の皆が、キャッサバを食べてみたいと感じたことでしょう。グローバルな視野が感じられた発表でした。

優良賞

中村中学校　一年

中嶋乃菜

チャレンジド

みなさんは体が不自由な方のことを何と呼んでいますか。今の日本では「身体障害者」として表現していることが多く見受けられます。私も同じように表現していましたが、ある日を境に違和感を覚えるようになりました。

そのある日とは私の祖父が病気になった日です。

私には七十五歳の祖父がいます。私の祖父は三年前、突然病気で左半身が不自由になってしまいました。身体が不自由な祖父と一緒に暮らしたり、接したりする中で、身体障害者という表現が本当にあっているのかと疑問を持ちました。確かに、体に障害を持っていることは事実です。しかし、私には「身体障害者」という表現によって、身体に障害のある方と健常者の間に見えない境界線を引いているように感じられました。

その日からこの見えない境界線をなくしたいと思い、いろいろと調べてみると、アメリカでは「チャレンジド」と呼んでいることが分かりました。これは、「挑戦という使命や課題、挑戦するチャンスや資格を与えられた人『The Challenged』を語源とし、障害をマイナスとのみ捉えるのではなく、障害をもつゆえに体験する事象を、自分のため、あるいは社会のためにポジティブに生かしていこう」という思いが込められています。

私はこのことに共感し、感銘を受けました。なぜなら祖父が病気になってから祖父を家族みんなで支えたり、祖父に会う機会が多くなりました。さらに祖父もそれに応えるように以前よりも優しくなったように感じ、前よりも家族を大切にしようという思いが大きくなりました。

このことはチャレンジドという言葉の意味である「挑戦という使命や課題」とは結びつかないように思いますが、祖父の介護に対して挑戦する、祖父が前よりももっと笑顔で暮らせるように、家族みんなでポジティブに生きていくということが結びつくように思います。

今、世の中は新型コロナウィルスの影響で大変な中、みんなで協力し合ってオリンピック・パラリンピックを開催し、それぞれの競技で頑張っている姿は、とても感動しました。

中でもパラリンピック競技の競泳で、鈴木孝幸選手が出場したすべての種目でメダルを獲得していたことにとても驚きました。

鈴木選手が本の中で「自分がおかれた環境の中で自分が出来る限りのベストをつくすということを一番に心がけています。出来なかったことについてはあまり考えない。そのことばかり考えてしまうと前に進めなくなってしまいますから。」と語っていらっしゃるのを目にしました。

私はこのことがまさしく、「チャレンジド」という言葉にあてはまることだと思います。人は誰でも、健全であろうがなかろうがみんな平等に様々なことに挑戦する権利を持っていて、その挑戦に自分の出来る限りのベストを尽くすことが出来るかどうかで、その先の成長に差が出るとも思いました。

今までの私は自分が出来る限りのベストを尽くしたとしても、失敗したらあきらめてしまうことがよくあり、もう同じ挑戦をやりたくないと思いがちでした。

ですが、今回の鈴木選手の言葉を見て、挑戦したことに失敗しても、もう一度ベストを尽くしてみようという気持ちになりました。

「チャレンジド」この言葉は体や心に障害があったり、あきらめてしまいたくなる人たち全てに当てはまる言葉だと思います。

私は自分だけではなく多くの人にこのことを広めたいと思いました。皆さんもよければもう一度考えて、そして「チャレンジド」使ってみてください。

審査員長のコメント

障害がある人を「チャレンジド」と呼ぶことを知ったことをきっかけに祖父に対する見方が変わり、自分自身の生き方も見つめ直したことがよく伝わってきました。パラリンピック出場の鈴木選手の著書を読んだ体験も発表に説得力を加えていました。

優良賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年
藤田紗帆

優しさの輪

私の叔母は、小児がんの子供たちの支援のためにレモネードを販売する活動を行っている。そもそも、小児がん支援のためのレモネードスタンドは、がんと闘うアメリカの少女が同じ病気と闘う子供たちを救うために、自宅の庭でレモネードを売り始めたことがきっかけである。アメリカでは、夏に子供たちが社会勉強のためにレモネードスタンドを開くことが恒例となっている。その少女が亡くなった今も、レモネードスタンドの活動は続いていて、日本でも徐々に広まってきているのだ。

五月の連休に、私はそのレモネードスタンドの手伝いをした。私はレモネードの瓶にシールを貼ったり、お釣りを渡したり、買ってくれた人にカードを渡したりした。当日は四百本ほどのレモネードを用意していたが、予定よりも早くにすべて売り切れた。レモネードを買ってくれた人はさまざまで、実際に小児がんを経験したことのある人だけでなく、たまたまそこを通りかかった人や、事前にＳＮＳで知り、来てくださった人などがいた。たくさんの人がレモネードを買い、叔母に質問をしたりするようすを見て、この活動が少しでも広がっていってくれたらうれしいと思った。

「小児がん」という言葉自体はほとんどの人が知っていると思うが、小児がんそのものについて詳しく知っている人は少ないのではないだろうか。日本では毎年約二千五百人が診断されるという小児がんは、進行するのが早く、長い治療が必要となるため、費用や精神的な負担が患者やその家族に重くのしかかる。しかし、大人のがんと比べると患者数が少ないことから、治療法などの研究のための支援がとても少ないそうだ。特に日本は、アメリカやヨーロッパよりも支援の仕組みづくりが遅れているのが現状だ。このレモネードスタンドの活動をきっかけに、少しでも多くの人に小児がんのことを知ってほしいと思った。

レモネードを売り始めて何時間か経ったとき、ある夫婦が近くに来て眺めていることに気付いた。そのときに売っていたレモネードは炭酸の入ったものだったため、炭酸が飲めないその夫婦はためらっていたのだ。「私は飲めないけれど。」とその方は言うと、レモネードと一緒に並んでいる募金箱にお金を入れてくれた。そのとき私は、心がほわっとあたたかくなった。レモネードを作っている人やそれらを販売している人、そしてこの活動に賛同して購入してくれる人といったたくさんの人の優しさが、支援につながっていくことを実感した。直接会ったことのない人のために支援をすることは、とても難しいことだ。心の中で思うことと実際に行動することは別物だからだ。そこで私は気付いた。「実際に行動しないと思いはつながっていかないのだ。」と。

叔母を手伝うために参加したレモネードスタンドの活動だったが、私はこの一日でたくさんのことを学ぶことができた。一人一人が行動し、たくさんの人の優しさをつなげていくことで、誰かを支えることができるのだ。小児がんのことだけでなく、誰かの助けが必要なときはたくさんあるはずだ。そんなときに、優しさの輪で、みんなが手を取り合って助け合えるような世の中であってほしい。私は、色々考えすぎて挑戦することをためらってしまったり、やる前からどうせうまくいかないのではないかと決めつけてしまったりすることがある。しかしこれからは、今までのように頭の中だけで考えて終わりにするのではなく、行動に移していきたいと思う。そして、自分から誰かのために手をさしのべ、優しさの輪をつなげていきたい。

審査員長のコメント

小児がん支援のレモネード販売に関わる中で、人々の思いや行動に感銘を受けたことが、具体的な描写で伝わってきました。その上で、小児がんの理解が十分でない日本社会の現状について、落ち着いた口調で問題を投げかけていました。

奨励賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年
大宮夏奏

命をつなぐ献血

ボランティアというと何を思いつくだろう。ごみ拾いや災害時の支援、介護・医療などだろうか。私も少し前までは、学区域でのパトロールや空き缶拾いなどを思い浮かべていた。しかし今、私が大切だと感じているボランティアの一つは献血だ。

私が献血に強く興味を持ったのは、昨年の年末、学校での講演がきっかけだ。講演があると聞いたときは正直に言えば、学期末に面倒だと感じていた。しかし、その気持ちは講演が始まるとすぐになくなった。驚くような話でいっぱいだった。献血に参加できるのは十六歳以上であること、集められた血液の八割は病気の治療に使われているということ。献血にはわずか四十分しかかからないということ、そしてここ十四年間、献血の人数が三割以上減っていること。私は自分が何も知らなかったのだと実感した。初めて、献血の大切さを真に理解した。

その日の下校時、最寄り駅に献血バスを見つけた。はっとした。こんなにも身近に献血があったというのに、私は気にも留めていなかった。私は何をしていたのだろう。しかし、それは過去の私だけではないことを悟った。駅にいる誰も目を止めていない。クリスマス直前の時期、皆楽しそうに歩いているだけ。献血の人数の少なさが、こんなところにも表れているとは。私は悔しいような気分になった。そしてバスに近づき、看板に気づいた。「A型不足。五十五人目標。」その場から目に入るだけでも五十五人はいるはずなのに。こんなことでいいのだろうか。

私は帰宅後、献血について調べてみた。三十代以下の献血の割合が減っているらしい。輸血を必要とする人のうち八割以上が高齢者であるらしい。そのため、少子高齢化が進むと、将来は血が足りなくなってしまうかもしれない。輸血を受けたことで生きられた人たちのコメントもあった。「私の体にめぐっているものって、百人以上の方の好意、優しさです。みなさんのおかげで私たち患者はこうして元気にいま生きています。」献血は誰かの人生をつなげられるボランティアなのだ。

それでも、血液が足りないというのは現実感がないようにも感じた。そこで私は想像してみた。今日、献血に足を止めなかったとする。数日後、家族が事故で大けがをし、輸血が必要になったらどうだろう。もし、輸血のための血液が不足していたら？献血は人を助けるものだ。その人は他人ではない。自分と親しい人かもしれない。いや、それは必ず誰かの家族で、誰かから大切に思われている人だ。そう思うと、献血はもう他人事ではない。

私が考えるのは、献血は確実に命を助けられるものだということだ。それも、たった数十分で。しかし、若い世代で協力する人は減っている。献血は少人数の協力ではどうにもならない。たくさんの人の積極的な行動が必要なのだ。私たち中学生は今後の献血を支えていくべき立場として、この課題に向き合っていかなくてはならないと思う。それなら、どうすれば献血は広まっていくだろうか。

私はまだ、献血に参加して自ら貢献することはできない。広めるといっても簡単ではない。そこでこのスピーチを通して、少しでも多くの人に知ってもらいたい。献血の大切さを。採血は怖い、痛そう、面倒だと感じる人もいるかもしれない。確かに初めてなら、不安もあるだろう。しかし、私たちが少しの勇気を出して献血をすることは、病気で苦しむ人、交通事故や出産で早急な治療を必要とする人、そしてその家族、多くの人の役に立つことなのだと思う。私たち一人ひとりが他人事と思わずに行動しなくては、その人たちを助けることはできない。

献血をしていきたい。そして、してもらいたい。その小さな決断は、必ず誰かの人生を支えるものになるから。

奨励賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年
柿澤咲希

決めることと後悔

自分で決めること。私はこのことがあまり得意ではない。優柔不断なのだ。でも今の私は、自分の意志で決めないと後に後悔することを知っている。

私は小学校の頃から吹奏楽をやっている。楽器を演奏することも、音楽を聴くことも大好きなのだ。周りのみんなの音に囲まれながら自分も楽器を吹ける喜び、何十人もの奏者の音が一つに重なって聴こえた時の壮大さや美しさ、聴いている人の心を動かす演奏をすることができた時の達成感や嬉しさは、本当に何事にも変えられず、いつも心を打たれる。しかし私は以前、こんなにも愛してやまない吹奏楽から離れる決断をしたことがある。それは小学校六年生の時だった。勉強のためである。東京都大会やさらなる上位大会で何度も金賞をとっていた私の小学校の吹奏楽部の練習は決して楽とは言えないものであった。毎日の朝練習と午後練習、そして土曜日の一日練習。他の事との両立がとても難しい。そのためか中学受験を考えている先輩たちは六年生の四月になると抜けてしまうことが多かった。休部である。当時受験を考えていた私は自分もそうなるのだろうと何となく思っていた。実際、六年生の四月になると同級生で受験をする友人が抜けてしまった。母に声をかけられたこともあり、周りに流されたかのように私は何となく休部を決断した。自分で深く考えずに。後悔の思いが表れはじめたのは五月の中旬頃だった。吹奏楽界で最大の行事、コンクールで演奏する曲が発表されたとの噂がまわってきた。小学生の部は自由曲一曲を演奏する。私の学校の場合、先生が半年近くかけてその学年の色に合った曲を選んで編曲して下さる。「動物の謝肉祭」という曲だった。家に帰ってきてすぐに曲の音源を聴いた私は衝撃のあまり何も考えられなくなった。自分の楽器にソロパートがあった。休部していなければ大役を任されていたのだ。それからは何にも集中できない日々が続いた。吹きたかった。大きなホールの大きな舞台で、あのソロを。一つ下の後輩が吹くことになったのだが、彼女は大きな期待に応える立派な演奏をした。とても難しいフレーズを音一つ外さずに、完璧に。自慢の後輩だと誇らしく思っている裏で、やはり心のどこかに悔しい思いが残り続けた。なぜ流されて休部を決めたのだろう。いくら忙しくなるにしても、あの一度しかない夏を吹奏楽にかければよかった。あれから三年以上経った今も自分の心にこんな思いが留まっているのである。

だからこそ私は、自分のことは自分で責任を持って決められる人になりたい。その決めた決断が正しいかなんて分からない。自分が期待に応えられていない気がして恐ろしく感じてしまうかもしれない。なかなか上手く行かずに後戻りしたい気持ちになってしまうかもしれない。けれど、自分で決めたのなら、少しずつでも一歩ずつでも頑張っていけそうだと私は思う。もしかすると、あの時の休部という選択は自分のために良かったのかもしれないし、そうでないのかもしれない。でもこのことによって優柔不断な私は、自分で決めることの大切さに気が付くことができた。これから先、吹奏楽部を続けるかどうかや進路のことなど、選択をせまられる場面はたくさん出てくるだろう。私の、すぐに母に意見を求めてしまう癖はなかなか変わらないかもしれない。それでも、最終判断は自分の意志で自分でする。そして自分で決めたからには絶対に頑張り抜く。これが私の描く理想の姿であり、この先の未来への誓いである。

奨励賞

東京都立桜修館中等教育学校　三年
亀岡華奈

一瞬の出会い

町の中で人とすれ違う。電車に乗る。買い物をする。一日の中で私たちは数えきれない程の人と出会っている。もしかしたら会話している。でも、親しくない限りほとんどの人が次の瞬間、互いの記憶を忘れていく。あの人オシャレだなとか、髪が青いとか、人を見かけると誰だって瞬時にその人の印象を抱くだろう。でも少し時間がたてば、自分の中からその人の記憶は消えてしまう。それはその人が自分にとってはもう関わりのない、重要ではない人だと頭の中で分類されてしまうからだ。

ある日のこと、私は親といざこざを起こしてしまい、イライラしながら家を出て学校に向かっていた。駅のホームに着き電車に乗ろうとしたところで、急に、ズボッと自分の身体が傾いていた。片足がホームと電車の間に挟まってしまったのだ。満員電車の中で多くの人が私に視線を向けていることもあり、私はとても恥ずかしい気持ちを抱え電車に乗った。そんな中、一人の女性が「大丈夫ですか。」と声をかけてくれた。けれども私は恥ずかしさと親との口論によって不機嫌だったことで、無言の会釈を相手に返した。相手の親切を素直に返せなかったことに内心申し訳なさがあったが、「この人とはこの先もう会わないのだから。」と、自分を納得させてしまった。

月日は過ぎ、ある日私は母への誕生日プレゼントを買うために雑貨店へと足を運んでいた。店内を歩いていた時、私はおじいさんに声をかけられた。中学生の女子の孫に送る誕生日カードのデザインに迷っているのだそうだ。私が店内に入った時からその人はカード売り場で真剣に悩んでいた。私はその人の思いに応えたいと思い、お孫さんの人柄を聞き出し、その子に似合いそうなデザインを選び抜いた。その後、会計に付き添い、プレゼントのラッピングについておじいさんに教えた。会計を終え、綺麗にラッピングされた商品が渡された時、私は「ありがとう。とても助かった。」という心からの感謝の言葉をもらった。私の心はとてもあたたかくなった。誰かを思い、その人のために尽くすこと。このことに知らない人、重要ではない人という隔たりは要らないのだと思えた。

自分の買い物を終えての帰路、私は今日の出来事と以前電車で声をかけられ、無愛想に応えてしまった出来事を思い出していた。私はこれまで、町中で人と接した時、この人達とはもう二度と関わらないだろうという気持ちが頭の片隅にあった。それは態度ににじみ出ていたと思う。でもそれで良いと思っていた。例え、すれ違う人々が私のことを「無愛想な人間」というイメージを抱いても、どうせ次の日には忘れているだろうと、そう考えていた。しかし、それは根本的に間違っていた。家族や友達など、関わりがある人にだけ良い顔をしておけば良いと思ってはいけない。私は名前を知らない人、もう関わることのない人でも、その人のために自分の力を注ぐことの喜びを知った。それは自分の成長につながった。他人を思いやる心、他人の立場に立って物事を考える力。これらはとても大切だ。そして、その「他人」を自分と関わりがあるかないかで分類すべきではない。

世界中で生活している何十億の人々の中で、自分と関わりを持つのはほんの数百人、数千人である。その人たちだけを思うのはとてもとても強いエゴだ。またネットが普及して現代、何十万、何百万もの名前を知らない人々と「繋がれる」。ネットでの誹謗中傷が多い中、大切なのは「他人を区別しないこと」だと思う。自分と相手に繋がりがなくても、その人を自分にとって価値のない人と思ってはいけないのだ。「人を大切にする」ということは簡単に見えて本当に難しい。まだまだ私は未熟者だ。それでも少しずつ、他人との隔たりをなくしていきたい。

奨励賞

國學院大學久我山中学校　三年
斉藤　周

アンコンシャス・バイアス

「アンコンシャス・バイアス」という言葉を聞いたことがあるだろうか。日本語では「無意識の偏見」と訳されるそうだ。その言葉に興味を持ったきっかけは、神戸市の小学校の道徳でアンコンシャス・バイアスについての授業が行われたという記事を見たからだ。

「アンコンシャス・バイアス」の有名な事例としては、アメリカのオーケストラの採用試験の例が挙げられる。一九七〇年代前半までアメリカの五大オーケストラでは女性の演奏者の比率が五パーセント未満だった。しかし、一九七〇年代後半から、応募者と審査員の間に幕を置き、誰が演奏しているのか分からない状態で審査をするようにしたところ、女性の採用比率が四十パーセント以上に増加した。これは審査員が無意識に男性を優遇していたことが分かる事例である。もっと身近な例では、血液型がＡ型の人は真面目、Ｂ型の人はマイペースなど血液型によって相手の性格を決めつけてしまうことや、外国人は自己主張が強く、日本人は自己表現が苦手と決めつけてしまうことなどがある。このようなアンコンシャス・バイアスは誰もが持っているといわれている。実際に私も友達の親が単身赴任していると聞いて、どちらの親かを聞く前に父親を思い浮かべてしまったが、実は母親だったという経験がある。また、友達の親が看護士をしていると聞くと、男性の看護士もいるにもかかわらず母親だと思ってしまったということもある。しかし、「無意識」で偏見を起こしてしまうなら対策の取りようがないという意見もあるだろう。だが、自分がどのような偏見を持っているか、またそれがどのような場面で出てきやすいかを考えることで、少しは相手を傷つけたり、相手にとって不利益になるようなことをしなくても済むかもしれない。そして、アンコンシャス・バイアスに気付くメリットとしては無意識で人に不快感を与えてしまうことがなくなる、いじめが少なくなる、差別が少なくなる等、様々な良いことがある。それは国連がかかげる17の目標であるＳＤＧｓの中の「ジェンダー平等を実現しよう。」や「人や国の不平等をなくそう。」にもつながってくると思う。一方でアンコンシャス・バイアスがあるメリットもある。それは、大量の情報をすばやく処理し、行動することができるようになるという点だ。つまり、アンコンシャス・バイアスが機能することで瞬時に物事を理解したり判断したりすることも可能となるということだ。

　このように、良い面と悪い面を持っているアンコンシャス・バイアスは誰もが持っていて完全に無くすことはできないものである。だからこそ、自分がどのようなアンコンシャス・バイアスを持っているかに気付き、それをコントロールしていくことが大切なのだと思う。自分自身も何かマイナスなことを考えたとき、それがアンコンシャス・バイアスからきているものではないか、もう一度立ち止まって考えてみるように心がけていきたい。

奨励賞

葛飾区立大道中学校　一年

高橋 真那人

真の平和の祭典を目指して

東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック。僕は、トップアスリートが出場できる世界最高峰の平和の祭典だと思っていました。無観客開催の為、残念ながら会場で観戦することはできませんでしたが、テレビの放送予定が出ている雑誌を読み込んで、見たいものは片っぱしから蛍光ペンを引き、ワクワクしながら当日を待っていました。

しかし、オリンピックが始まる前に、信じられないニュースを目にしました。ワールドカップ予選の為に来日していたサッカー・ミャンマー代表のピエリアンアウン選手が、帰国便に乗る直前に保護を求め、難民認定を申請したのです。「国の代表」になるということは、選手にとって「夢の代表」の座です。僕は、小学校一年生の時からサッカーチームに入っているので、代表になる為には、とんでもない日々の努力と実力が必要だと分かっています。自分の国に帰国しないと決断したこと、そして大好きなサッカーができなくなるかもしれないと思うと、僕は苦しくなりました。

さらに、「血でぬれた旗の下では行進しない」と、クーデターを起こしたミャンマーの軍事政権に抗議し、オリンピックへの参加を拒否した競泳選手もいます。逆にオリンピックに参加を表明したバドミントンの選手には、「軍事政権の下で参加するのだから、ミャンマー人を代表するなどと言うな。」と言った批判が出たそうです。オリンピックに出ることを夢見て、毎日毎日努力してきた選手の気持ちを考えると、僕は胸が張り裂けそうでした。

オリンピックとは、「スポーツを通じた人間育成と世界平和を究極の目的」としているそうです。しかしこれが真の平和の祭典なのでしょうか。パラリンピックでは、タリバンの首都制圧で代表選手が出国できず、アフガニスタンの国旗を、代役の人が持って入場行進する姿が、印象的でした。

僕は正直、戦争や人が死ぬと言ったことを身近に感じたことがありません。もちろん、知ってはいますが、それは、本の中やテレビの中での出来事に過ぎません。ですが、この夏休みにオリンピックやパラリンピックを通して、本気で知りたいと考えるようになりました。自分事として考える為に、まずは、自分の住んでいる葛飾区のことを調べてみました。すると、白鳥に軍事遺跡である「青砥高射砲陣地」があることが分かりました。僕は直接見に行くことにしました。とある駐車場の中に、一部だけコンクリートが出ている不自然な丸い形を見つけました。これが、太平洋戦争中、連合国軍航空機迎撃の為に備えつけられた「青砥高射砲陣地」でした。戦時中はここで、敵機の迎撃が行われていたのかと思うと、僕はゾッとしました。

二〇二一年の夏、僕はこの葛飾の空で、オリンピックとパラリンピックの為に展示飛行を行うブルーインパルスを見ました。かっこよくて、なんだか幸せな気持ちにさえなりました。しかし、七十六年前のこの空には、アメリカの爆撃機B二十九が飛び、当時の人は空を見上げることが怖かったに違いないと思います。

僕は今、世界で起きている戦争を止めることはできません。ですが、いかに戦争が恐ろしく、命を粗末にしてはいけないかを知っています。生まれてから戦争やテロを好む人はいないと思います。僕が、「どんな理由があろうと戦争は絶対にだめだ」と学んできたように、世界中の子供達にも命が一番大切なのだと教えてもらえる日がきますように。そして僕自身も、世界中にたくさんの友達を作って、相手を理解し続け、尊重できる人になりたいと思います。

奨励賞

サレジアン国際学園中学校　三年
谷本愛実

唯一の被爆国

毎日続く、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻。今、世界は「核の脅威」に直面しています。そのような中、昨年発効した核兵器禁止条約をうけ、初めての締約国会議が開かれたというニュースを見ました。しかし、日本は唯一の被爆国であるにもかかわらず、核兵器禁止条約に参加していません。その理由として岸田総理大臣は、「核兵器を保有する国々が参加していないのに、日本だけが加わって議論をしても、実際の核廃絶にはつながらない」ということを挙げています。また、外務省の関係者は「一気に核廃絶をと言えば、アメリカの核戦力も含めた拡大抑止を否定することにもなり、現実的な選択ではない」と答えています。

しかし言わせてください。条約参加が核廃絶につながるかつながらないか。現実的な選択かそうではないか。核兵器を保有しているかしていないか。そんなことを論ずるより前に、日本が唯一の被爆国であることの方が大事だと、私は考えます。

なぜなら、核兵器を保有していなくても、できることはあるからです。二〇一〇年、日本はオーストラリアと、軍縮・不拡散イニシアティブを立ち上げました。これは核兵器を保有していない国だけで構成されていますが、世界中の国が参加する核不拡散条約に、いくつもの案を提出するなどの貢献をしています。日本には、唯一の被爆国だからこそ伝えられること、そして伝えるべき「原爆」があるはずです。それは、亡くなった方の人数や、壊れた建物の数、爆弾の威力などの数値で表されるものではありません。

私は、小学六年生の時、小学校の平和学習で広島を訪れました。事前学習ではビデオで語り部さんの話を聞き、現地では小学校や老人ホームを訪ねて話を聞きました。広島には、原爆を伝える資料館がたくさんありました。街に立つ石碑や被爆者の方々に残る傷など、さまざまな形で「原爆」が残っていました。その爪痕を見て、事前学習の段階では想像することのできなかった、原爆の恐ろしさ、戦争の恐ろしさを感じました。被爆者の方々が、今でも差別的な発言や後遺症に苦しんでいることを聞きました。原爆がもたらした被害は、爆発によって何万人もの命が奪われたことだけではないのだと知りました。語り部さんたちは皆、「あの時自分も死んでいれば」とおっしゃいます。それでも前を向いて、次の世代を生きる私たちに向けて、原爆の悲惨さを伝えてくださっています。だから、日本が伝えるべきこと、それは、原爆のむごさ。一瞬で人が焼けこげること。壁に、人の影が焼きつくこと。何年も元気だったのに、放射能によって、ある日突然亡くなることです。

私にはまだ、政治がわかりません。国同士の抱える問題というものが、どのくらい複雑なものなのかを理解できていないかもしれません。しかし、それでも私は、条約に参加してほしい。

日本原水爆被害者団体という、全国の被爆者の方々からなる協議会があります。団体の方々は、被爆体験を語りついだり、政府への要請活動を行ったりしていらっしゃいます。これらの活動によって、世界に原爆が広く認知されるようになり、国際シンポジウムなども開かれました。日本が条約に参加すれば、このような活動を大規模に行うことができます。核廃絶は、まず核の恐ろしさを知るところから始まります。そして核の悲惨さが伝われば、核廃絶を求める運動を広げていけると、私は思います。

語り部さんたちの話の最後に、必ず言われる言葉があります。「これからは、あなたたちが平和な世界をつくっていくのよ。」

だから、私は何度でも言います。日本は核兵器禁止条約に参加するべきです。永遠に、日本が「唯一の被爆国」であり続けるために。

奨励賞

國學院大學久我山中学校　三年
古宮侑季

本当の友達

本当の友達とは、どのような存在だとあなたは考えますか。何でも話すことができる存在ですか。または、全て否定せずに何でも受け入れてくれる存在ですか。

小学校二年生の頃、私はある友達と出会いました。彼女とは同い年で、共通の趣味であるゲームから意気投合し、すぐに仲良くなりました。それから私たちは登下校を一緒にするようになり、休みの日には、必ずどちらかの家で遊ぶようになりました。面白いスマホゲームを見つけては熱中し、一日中そのゲームをしたこともありました。しかし、私は中学受験をすることになり、受験勉強を本格的に始めた小学六年生の頃から、だんだん遊ぶことが少なくなっていきました。それでも私たちは毎朝登下校を一緒にしていたため、毎日話すことはできていたのですが、やはり私は遊べないことが何よりも悲しく、辛い思いを抱えていました。そんな受験生活の中、受験まであと半年といったところで、彼女から、

「スマホゲーム一緒にやらない？」

と、遊ぶ誘いのメッセージが届きました。私はダメだと分かっていながらも、久しぶりだし少しぐらいはいいだろうと考え、

「やろう。」

とメッセージを送ってしまいました。それからすぐにゲームを始めることになり、準備をしていざ始めようとしたとき、彼女から、

「今年受験だよね？」

とメッセージが届きました。私は受験を決めてすぐに彼女に伝えたため、知っているはずだけれどどうしてそんなことを聞くんだろうと内心疑問に思いながら返事を打つと、

「受験まであと半年しかないよ。ゲームしている暇は本当にあるの？　こんなことしてないで、早く勉強した方が絶対にいいよ。」

と私を叱るメッセージがきて、私は最初とても驚きました。喧嘩をしたことはあっても、彼女とはいつも一緒にヘラヘラ笑い合っていたし、何より真剣に友達に叱られたことがなかったからです。しばらくして胸が苦しくなり、涙がでてきました。そうだ、彼女の言う通り、私はゲームなどをしている暇はない。勉強して周りの期待に応えるんだ。と気持ちが改まり、私は涙ながらに、

「ありがとう。」

と打って彼女へ送信し、すぐにスマホを閉じ机に向かって勉強を始めました。スマホには、

「頑張って。」

というメッセージだけが取り残されていました。

私はこのような経験から、本当の友達とは、自分が間違ったことをしているときに、自分を叱ってくれる存在だと考えます。お互いのためを思って、欠点を指摘し合える仲こそが、本当の友達になるために必要なことではないのでしょうか。私は、きっと彼女があのとき遊びに誘ったのは、一緒にゲームをするという目的ではなく、私を怒るためだったのではないかと考えています。おそらく彼女は私と話す短い時間の中で、私の受験に対する気の緩みに気づいていたのでしょう。友達を怒るとは、自分が嫌われてしまってもいいという覚悟が必要で、相当な勇気もいるのであっただろうにも関わらず、私のためを思って叱ってくれた彼女には、本当に今でも感謝してもしきれません。彼女がいなかったら、私はここにはいなかったでしょう。今年、彼女は高校受験を控えています。助けられた分、今度は私が彼女のことを助けていきたいです。本当の友達であり続けるために。

奨励賞

國學院大學久我山中学校　三年

松本優太

ＳＮＳ時代を生きる僕ら

中学校に入学してから一ヵ月程経った頃。学校から下校している時のことだった。「友達ほしいなー。」何気なく放った僕の一言に、隣を歩いていた幼馴染がこう返事をしてくれた。「お前もＳＮＳ始めれば？」僕はＳＮＳという何だか新鮮な単語に興味を引かれた。すると友達が続けて「色んな人とメッセージでやりとりできるぜ。」と。

実は当時の僕は少し焦っていた。というのも中学校に入学してからの一ヵ月間、クラスメイトに気が合う人や、共通の趣味や話題で盛り上がることのできる人を見つけておらず、このままではクラスで孤立してしまうのではないかと少々不安だった。

そこで僕は、現状を打開するべく幼馴染に言われた通り、ＳＮＳを始めてみることにした。家に着くなりスマホを開く。ＳＮＳを始めるにはアカウントを作らなければならないのだが、登録自体はとても簡単で三分あれば出来てしまう。僕は登録の作業中、「こんなにも手軽く世界中の人々と交流ができるなんて、ＳＮＳはすごいな。」と胸を弾ませていた。そして登録が終わるとその日はスマホ片手にＳＮＳに没頭した。

それから数ヶ月。僕はすっかりＳＮＳの虜になっていた。色んな人とメッセージや写真を共有する機会も増え、新しい友達も出来た。また、有名人や好きなゲームに関する情報もいち早く確認するようになっていた。

しかし、同時に自分の生活がＳＮＳによって支配されているのではないかと思うようになった。振り返ってみると、僕は少しの空き時間でもスマホを触ることに集中していて、友人や家族との会話を蔑ろにしていた。また、次々に更新される他人の投稿を見て、一喜一憂する事も多かった。そして僕はそんな自分が嫌いだった。「どうしてスマホの通知ばかり気にしてしまうのだろう。」「どうしてフォロワーやいいねの数に執着してしまうのだろう。」

自分がＳＮＳというオンラインの空間に何を求めているのか分からなくなった僕は、一度ＳＮＳを使うことのメリット・デメリットについて考えることにした。

まず、ＳＮＳを使うことのメリットは、何と言っても「手軽に、いつでも、どこにいても、誰とでも、様々な情報の交換が出来る。」と言う点である。僕も実際、今まであまり会話したことの無かった学校の同級生と、ＳＮＳを通してコミュニケーションをとり互いに趣味を共有することが出来た。また最近では、ＳＮＳを用いたイベントの企画やスポーツ中継など、新しい使われ方も注目されている。

しかし、ＳＮＳを使うことで生じる様々なデメリットも忘れてはならない。まず注意したいことはＳＮＳ中毒だ。「いいね」や「フォロワー」の数、もらったコメントなどを気にするあまり、強迫観念となって健康を害したり、心理的な負担が表れたりするというもの。僕はその症状の一歩手前にいた事に気づかされた。また、その他にもプライバシーの侵害や誹謗中傷、デマの拡散など、ＳＮＳには様々な課題が存在するという現状を知った。

そしてそれ以降、僕はＳＮＳの使い方を見直した。使用時間を減らし、なるべくスマホを触らないようにした。最初は名残惜しく感じる事もあったが、段々と気持ちが楽になっていった。また、友人や家族との会話の有難さを再認識できた。

最後になるが、ＳＮＳは人類の技術革新の賜物である。これからもＳＮＳの広がりによって我々の生活は、もっと面白く便利なものへと変化していくだろう。その上で、プラスの面とマイナスの面を適切に理解してＳＮＳを活用する力が今を生きる我々に求められているのではないだろうか。

奨励賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年
村田愛実

一人ひとりが輝ける社会へ

女子力、理系女子、女子アナ、女医。皆さんはこれらの言葉を一度は耳にしたことがあるだろう。そのとき疑問を持ったことはないだろうか。女、男と区別して捉える意味について。これらの言葉の背景にはジェンダーバイアスがある。ジェンダーバイアスとは性差に関する無意識的な固定観念や偏見のことを言う。これは全ての人に自分事として捉えてほしい問題である。

私自身、疑問を持つきっかけとなったのが夫婦間での呼び名について学んだ時だ。例えば、主人や家内、奥さんは夫婦に上下関係を生み出している。夫は外で仕事、妻は家で家事と、夫婦の役割分担さえ暗示されている。ドラマなどで使われるそれは、性別による差別が根強いことを強く感じさせる。それと同時に、女、男それぞれの偏見を含んだ理想像が社会での一般論となってしまっていることに危機感を覚えた。

また、男女でのイメージカラーが青と赤になってしまっていることも問題だ。トイレの色分けはいつも女性が赤で男性が青。女性のマークはスカートで、男性はズボン。小学校で配られたお道具箱は、女の子はピンクで男の子は青。ランドセルも自然とその色分けになっていた。思いのほか、多くのことで男女は区別されている。

これらは区別であって、差別でないという人もいるだろう。しかし、女性や男性の「こうあるべき姿」に縛られ、生きづらさを覚えている人はいないだろうか。あなたの周りに男らしさ、女らしさという言葉について悩んでいる人はいないだろうか。あなたの価値観がすべてではないのだから、ぜひ周りを見渡し、考えてみてほしい。

私も、女らしさについて見つめなおすきっかけになった出来事がある。

小学校の頃に通っていた児童館の学童で遊んでいた時、帰る時間になった私は片付けをしようとしていた。その時、先生から

「女の子なのだからいいお嫁さんになるためにお片付けはしっかりしようね。」

と言われた。その頃の私はまだまだ未熟で、本当に「いいお嫁さん」にならなくてはいけないと信じていた。人の言動に疑問を持てるようになった今、考えると、「いいお嫁さん」という表現に不快感を覚え、男女の差を明確化する言葉に憤りを感じる。

ジェンダーバイアスの一因としてジェンダーギャップが挙げられる。毎年の調査によると、日本のジェンダーギャップ指数は一五三か国中一二一位で先進国の中で最下位を記録している。特に遅れているのが政治・経済分野で、国会議員に占める女性の割合は十四・四パーセントと低く、女性の社会進出を遅らせる原因となっていると考えられる。

このような性別の違いによる差別はするべきではない。なぜなら、女性も男性も一人ひとり同じ人間であるからだ。現状、性差によって役割を押し付けられたり、待遇が変わったりと個々が尊重されていない社会であることを皆さんには気付いてほしい。ふとした瞬間に出た何気ない言葉が、女性や男性の心を傷つけてしまっているかもしれないという事実も。

私は、性別に関係なく一人ひとりがありのままの自分でいられる社会をつくっていきたい。そのために、身の回りにあるさまざまなジェンダーバイアスを探し、当たり前を疑うことを実践したい。知らなければ、今生きづらさを抱えている人の立場に立つことさえも出来ないと思うからだ。一人ひとりが自分の色で輝ける世界へ少しでも前進するきっかけになることを信じて取り組んでいきたい。

奨励賞

葛飾区立水元中学校　一年
山田りる

自閉症について知ってほしい

「ちょっと待ってね」私が双子の妹達にそう言った。でも、妹達にはそれが出来ない。なぜなら、私の妹達は自閉症だからだ。

自閉症と言っても、それを言葉で説明するのは難しい。それは、自閉症の特性が十人十色で、百人いたら百通りの特性があるからだ。

妹達も双子で、同じ環境で育っていても、二人ともそれぞれに違う特性があることを目の当たりにしているので、私は特にそう思う。

例えば、双子の姉の方は、自分の集めているアニメのキャラクターカードが一枚でも無くなると、大きな声でさけびながらパニック状態になる。本人にとっては大事件で、このようなパニック状態はカードが見つかるまで続くので、家族総出でのそう索が始まる。本人にしかどこへやったのか分からない物を出来るだけ早く見つけなければならないので、正直、ものすごく大変だ。

双子の妹の方は、音にびん感だ。本人にしか分からない苦手な音があるらしく、スーパーなどの外出先で何気なく流れている音楽でも、苦手な音があるとすぐに耳をふさぎ、下を向いてその場から離れようとする。家ではテレビをつけると、苦手な音のコマーシャルを怖がってすぐに消してしまったり、リモコンをかくしてしまったりするので落ち着いてテレビを見ることが出来ない。

もちろん二人に共通する特性もある。じっとしていることが出来なくて手足をブルブル動かしたり、その場でピョンピョン飛びはねたりして、すぐに動き回ってしまうので、一しゅんたりとも目をはなすことが出来ない。また、言葉の発達が遅れているため、言葉でのコミュニケーションがまだ出来ない。私達家族には理解できても、全く知らない他者が理解するのは難しい。なぜなら、名前を呼んでも返事をしなかったり、よく独り言をしゃべっていたりするからだ。

このような双子の妹達の例は、自閉症の特性を知っている人にとっては、「わかる。わかる。」と共感できる出来事だと思う。でも、自閉症を知らない人にとっては「なんでさけんだりあばれたりしているんだろう。」、「なんで飛んだりはねたり走り回ったりしてじっとしていられないんだろう。」などと疑問に思うだろう。こうした疑問が生まれてしまうのは、きっと自閉症について知らないからだ。

目が見えなかったり手足が不自由だったりと、目に見える障がいは、どれだけ大変か自分でも考えることが出来るので、どのようなサポートが必要か想像しやすい。

しかし、自閉症のような目に見えない障がいを想像するのはとても難しい。身近に障がいをもった人がいなかったり、成長の過程で関わりがなかったら、知らないまま育ってしまうので、障がいのある人達を自分とは違う人だと感じてしまうかもしれない。特に日本では障がいのある、なしをゼロか百で考えがちだが、アメリカなど自閉症に対して理解が進んでいる国ではゼロから百で考えられている。ゼロから百の中に自分もいるのだと思うと、みんなが同じ人間なんだと考えられるはずだ。

障がいをもって生まれてくるのは、だれのせいでもない。健常者に生まれても事故や病気で障がい者になることもある。私は妹達が障がいをもっていたため、小さいころから一緒に暮らしていくうちに疑問に感じたことは母に聞いて自閉症について自然と理解することが出来たが、家族や身近に障がいをもった人がいない人達に理解するのは難しいと思う。だから私達と同じように理解してほしいとは言えない。しかし、小さい頃から学校などで交流を深め、特性をもっと知ってもらうことによって、相手のことを思い合える、よりよい社会になるはずだ。「知る」ということはとても大切だ。だからこそ、私は自閉症について、もっとたくさんの人達に知ってほしい。

審査員長講評

十文字学園女子大学教授
冨山哲也

まず、本日発表された主張について、発表順に簡単に講評を述べさせていただきます。

吾妻真希さんの「見えない壁を越えて」では、言葉の大切さを踏まえつつも、言葉を越えて理解することの必要性が、体験をとおして丁寧に論じられていました。

片山菜緒さんの「壁をなくす」では、共生社会をいっそう前へ進めるための方策として、知ることと助けることが重要であるという提言がされていました。

金子智春さんの「実店舗とネット通販」では、ネット通販が全盛の中で生き残る実店舗の特徴とは何かということを分析し、社会の活力の大切さを訴えていました。

鈴木月菜さんの「買い物難民」では、全国的に問題になっている買い物難民に着目し、それが生まれる社会的な背景や解決のための方策を分かりやすく論じていました。

ソン楽人さんの「キャッサバ」では、野菜栽培の体験からキャッサバに興味を持ち、自然や生活と関連づけながら農業に従事したいという未来像が描かれていました。

辻谷和香奈さんの「欲望と幸せ」では、自身の摂食障害の経験を振り返り、人間の欲望や不安、周囲の言動が、社会全体の過ちにつながる懸念があるという指摘をしていました。

戸田幹子さんの「あなたのそばに」では、転校によって感じた孤独感を振り返りつつ、私に寄り添ってくれていたかもしれない人に思いを馳せ、今、自分が誰かの力になりたいという考えに至っていました。

中嶋乃菜さんの「チャレンジド」では、障害がある人を「チャレンジド」と呼ぶことを知ったのをきっかけに祖父に対する見方が変わり、自分自身の生き方も見つめ直したということが伝わってきました。

藤田紗帆さんの「優しさの輪」では、小児がん支援に関わる中で、人々の思いや行動に感銘を受けたことが伝わりました。その上で、社会の在り方について問題を投げかけていました。

向井琴羽さんの「理解のある未来を信じて」では、LGBTで悩みを抱えている人に向けて、「理解者がいる」という強いメッセージを送るとともに、社会全体の価値観の転換も求めていました。

全体をとおして多様な問題が取り上げられており、中学生の視野の広がり、関心の深まりを感じることができました。その分、審査も大変難航しました。審査の場では、社会的な事柄を自分のこととして考えていることがよく伝わる力強い文章・発表を高く評価したいという意見が出されました。

また、私たち審査員は文章を先に読ませていただいていますが、文章を読んだときに感じたことと、実際に発表を聞いて感じた印象が変わってくるという感想も出されました。これは、この場での口頭発表の仕方が、説得力に影響を与えているということだろうと思います。その中で発表者の皆さんには、中学生らしさを大事にし、自分の言葉で考え表現するということを、いっそう大事にしていただきたいという意見が出されました。社会的な問題については、様々な解決策が既に表明されていることがありますが、誰かが言った言葉ではなく、中学生である自分が身近なことに引きつけて考え、それを自分の言葉で論じることが非常に説得力をもって訴えかけてきます。そのことを今回の発表をとおして改めて感じることができました。

さて、このように社会的な問題に関心がもてる、自分の言葉で表現できるということについては、家庭でのご家族との会話、あるいは学校における先生との会話というものが大変大きな影響をもっていると思います。今日の発表に至るまでにも、家庭で、あるいは学校で、生徒と家族の方々、先生方で様々な会話があったのだと思います。そのことが今日の素晴らしい主張の基盤になっていたということが感じられました。本日のこの会をきっかけにして、発表した生徒さん同士も知り合いになっていただき、ますます豊かな会話の輪を広げていく機会にしていただけたら幸いです。

以上、大変雑駁ではありますが、私からの講評とさせていただきます。ありがとうございました。

最終審査員の感想

ノンフィクション作家

川内　有緒

中学生の皆さんの中に、さまざまな社会問題への意識や他者への優しさがあるのを感じました。自分自身の辛い体験をきかっけに他者が抱える困難へと眼差しを向けるものから、逆に背景が異なる他者との出会いにより、自分自身を見つめ直すものもありました。

残念ながら、わたしたちの社会はまだ「誰にでも優しい社会」とはいえないでしょう。いつの日か、皆さんひとりひとりの持つ優しさが社会を循環し、満たしていくことを願ってやみません。同時に、ひとりの大人としては、誰もが豊かな人生を送れるように、社会の仕組みを整えて行く努力を怠らずにいたいと思います。

みなさんの今回書いた文章や話した主張は、この先に社会を変えるきっかけになるかもしれません。どうぞ、文章を書き続けてください。上手である必要はありません。なるべく自分の内側から発する言葉を綴り、語り続けてください。

東京都私立中学高等学校父母の会中央連合会副会長

倉片　なお子

感情豊かに訴えかけるような、淡々と心に響かせるような、緊張しながらも一つ一つ言葉を紡いでいくような、発表。

それぞれの伝える力の強さを感じました。

発表内容も多岐に亘り、身近な出来事から感じたこと、将来への強い思い、障害者との共生、社会問題まで説得力のある内容で、中学生ながらこれほど深く考えていることに驚きました。また自身がすべきことを理解し、それを表現し、行動しようとしている。この思いが多くの人に届き、実現できることを願っています。

これからいろいろなことを経験し、いろいろな「気づき」に出会うことと思います。手を差し伸べ、見守り、向き合い、互いを理解し、チャレンジし続けること。今の皆さんの思いを忘れずに今後も発信していってほしいと思います。

東京都公立中学校ＰＴＡ協議会会長

関口　哲也

皆さんの中に躍動する思いを主張として、間近で聞かせて頂き、ありがとうございました。

皆さんの主張は、現在の世の中のありさまを、大人顔負けに敏感に感じ取っているものであり、また中学生ならではの悩み、苦労に対して真剣に向き合うものでした。これらの主張を聞くことによって、皆さん方が大きく成長していることが伝わってきて、非常に逞しく心打つ機会で感動する時間でした。

今後の人生において、数多くの躍動する機会に出会うと思います。その際には、大いに感動し、悩み、考え、相談して、自らの思いを更にはっきりと主張し、伝えることができる人に成長されることを期待しています。

東京都教育庁指導部　義務教育指導課長

市川　茂

今年度も性的指向・性自認、人間の欲望、友人関係、コミュニケーション、障害者、ネット通販などテーマが多岐にわたっていました。事前に文章を読ませていただきましたが、どの主張も中学生らしい視点で課題や問題点を分析し、説得力のある提案や提言がされており、大変感心しました。

大会当日、皆さんが壇上で主張している姿も非常に立派でした。聴衆を見て語り掛けたり、内容に応じて伝え方に変化を付けたりするなど様々な工夫が見受けられ、事前に文章を読んでいたときよりも、何倍も説得力が増したように感じました。私も聴衆の一人として大きな感動をもらいました。

これからの社会は、皆さんが中心となります。皆さんが感じた疑問や問題点などを言葉にして伝え合い、社会全体が一丸となって取り組んでいくことによって、さらに素晴らしい世の中になっていくものと思います。これからの皆さんの更なる御活躍に期待しています。

東京都生活文化スポーツ局　若年支援担当部長

米今　俊信

今年も大会を開催でき、発表者の皆様、学校関係者の皆様、当日お集まりいただいた御家族の皆様に改めて感謝申し上げます。

私も事前に作文は読みましたが、実際に姿を見ながら発表を聴くと、その迫力に圧倒されました。日々の生活体験の中から、発表者の皆さんが、人間の欲望や差別感情、多様性の尊重等に真摯に向き合い問い直していくという心の動き、思考のはたらきに、成長過程にある中学生の生の輝きを感じました。自分が見聞きしたり調べたりした事象を、自分の感覚でとらえ直して考えを深め、世の人々に主張し問うていこうとする、そのような姿勢で書かれた作文とその発表は、説得力があり心が揺さぶられました。

発表者の皆さんには、今後さらに感性と表現力を磨き、よりよい社会の実現に力を発揮されることを期待しています。来年参加する中学生には、大会の様子が動画で公開されますので、聞き手の心に響く表現の手本としていただきたいと考えています。

審査員の皆様

令和４年度　中学生の主張東京都大会　当日の概要

○ **日　　時**　令和４年９月11日（日曜日）午後２時から午後４時50分まで

○ **場　　所**　東京都議会議事堂１階　都民ホール

○ **主　　催**　東京都

○ **次　　第**　開　　会

　　１　あいさつ　　東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長　　米今　俊信

　　２　中学生の主張　　発表者１０名

　　― 休憩（審査）―

　　３　表彰式

　　（１）審査結果発表　　審査員長　　冨山　哲也

　　（２）表彰状贈呈

　　閉　　会

○ **審　査　員**

《審査員長》冨山　哲也　　十文字学園女子大学教授

川内　有緒　　ノンフィクション作家

倉片　なお子　　東京都私立中学高等学校父母の会中央連合会副会長

関口　哲也　　東京都公立中学校ＰＴＡ協議会会長

市川　　茂　　東京都教育庁指導部義務教育指導課長

米今　俊信　　東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長

○ **審査基準**

（１）論旨・内容について

ア　中学生らしい新鮮な主張や新しい視点があるか。

イ　個人の感想や体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。

ウ　提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。

エ　論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

オ　表現が適切であるか。

（２）論調・態度について

カ　聴衆に共感と感動を与えているか。

キ　説得力があるか。

ク　熱意と迫力があるか。

ケ　主張の内容に合った伝え方・態度であるか。

【参考】令和４年度　中学生の主張東京都大会　募集概要

１　応募資格

令和４年４月１日現在、東京都内に在住または在学の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢の者。

※国籍は問わないが、応募作品については日本語で発表できること。

２　テ ー マ

⑴　社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

⑵　家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

⑶　テレビや新聞などで報道されている 少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

３　締　　切

令和４年７月 15 日（金曜日）

４　審査及び表彰

主催者において、大会の前に中学生の主張東京都大会発表者（出場者）10 名及び奨励賞 10 名を選考し、８月中に在籍校に結果を通知する。大会当日は発表者 10 名が、応募した原稿に基づいて５分程度の発表を行い、審査員の協議で知事賞（１名)、東京都教育委員会賞（２名)、優良賞（７名）を選考した後、表彰を行う。

５　そ の 他

⑴　知事賞受賞者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「第 44 回　少年の主張　全国大会～わたしの主張 2022 ～」の出場候補者として推薦する。

⑵　応募者全員に、参加賞として記念品を贈呈する。

⑶　受賞作品を発表文集にまとめ、学校等へ配布する。

⑷　受賞者の写真、氏名、学校名、学年及び作品名を、東京都のホームページと発表文集に掲載する。

応　募　状　況

1　今年度の応募状況

（単位 : 人、団体）

応募者数				応募団体数
1 年生	2 年生	3 年生	計	
656	2,025	2,966	5,647	39

2　過去の応募状況

（単位 : 人、団体）

年度	応募者数	応募団体数
昭和 54	219	-
55	184	-
56	265	37
57	454	40
58	142	27
59	169	39
60	230	40
61	289	58
62	509	79
63	527	80
平成元	742	102
2	326	70
3	355	67
4	472	69
5	385	36
6	280	53
7	259	48
8	230	40
9	500	58
10	739	45
11	491	37
12	639	42

年度	応募者数	応募団体数
13	797	41
14	562	37
15	736	48
16	1,961	60
17	1,552	58
18	2,230	84
19	1,919	86
20	2,276	79
21	4,105	105
22	3,153	98
23	1,864	77
24	3,316	93
25	3,739	72
26	8,446	97
27	9,983	95
28	8,620	95
29	7,781	70
30	6,878	62
令和元	5,784	52
2	6,482	65
3	5,932	57

過去の入賞者（直近３年間）

令和元年度（第41回）　令和元年9月8日・東京都議会議事堂都民ホール

賞	学　校・学　年	氏　名	作　品　名
知　事　賞	筑波大学附属視覚特別支援学校（中学部）・1年	藤田　大悟	心の扉
東京都教育委員会賞	立川市立立川第七中学校・3年	張替　望恵	尊い命は繋がっている
	台東区立忍岡中学校・3年	本間　樹音	国際人とは
優　良　賞	東京都立大泉高等学校附属中学校・3年	倉島　菜帆	心のかべをとりはらおう
	東京都立大泉高等学校附属中学校・3年	瀧澤　結	スマホに使われない
	世田谷区立芦花中学校・2年	津留　歩花	安全な社会作りのために
	國學院大學久我山中学校・3年	不破　萌瑛	「黄色い四つ葉のクローバー」
	國學院大學久我山中学校・3年	前田　華果	本当の最後のスリッパ
	稲城市立稲城第五中学校・2年	皆川　桜	私達にできること
	葛飾区立立石中学校・1年	柳川　天我	僕達はなぜ学校に行くのか

令和2年度（第42回）　令和2年9月13日・東京都庁大会議場

賞	学　校・学　年	氏　名	作　品　名
知　事　賞	葛飾区立青戸中学校・1年	松本直汰郎	普通とは何か
東京都教育委員会賞	北区立浮間中学校・2年	大宮　幸穂	舞台に上がる
	板橋区立志村第四中学校・3年	鹿島　菜乃	魔法
優　良　賞	世田谷区立芦花中学校・3年	太田　佳奈	見えない優しさ
	あきる野市立増戸中学校・2年	奥山　朋佳	「私の祖父母」
	立正大学付属立正中学校・2年	神本　真宏	感謝の気持ち
	立川市立立川第一中学校・2年	黒澤　美春	思い切って行動に移そう！
	学習院女子中等科・2年	髙橋　亜依	見えない相手からの言葉の暴力
	目黒区立大鳥中学校・3年	西田　圭吾	レッツチャレンジ精神
	品川区立荏原第一中学校・2年	藤沢　亮吾	学校休業で僕が考えた事・感じた事

令和3年度（第43回）　令和3年9月12日・東京都庁大会議場

賞	学　校・学　年	氏　名	作　品　名
知　事　賞	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	坂口　礼佳	兄の話
東京都教育委員会賞	あきる野市立増戸中学校・3年	奥山　朋佳	未来へつなぐ
	板橋区立志村第四中学校・3年	菊池　香帆	好きと伝えられる社会へ
優　良　賞	東京都立葛飾ろう学校・3年	大澤　美輝	差別の無い社会を
	大田区立大森第八中学校・3年	鹿島　靖媛	一人一つの命
	國學院大學久我山中学校・3年	佐藤瑛太郎	「勇気の一歩」
	立川市立立川第二中学校・3年	下津浦美結	矛盾する「正しい」
	葛飾区立金町中学校・1年	住吉　拓己	2030年に向かって
	世田谷区立芦花中学校・3年	乳井　美桜	地球のためにできること
	立川市立立川第八中学校・3年	吉田　琉生	本当のバリアフリー

令和４年度　中学生の主張東京都大会
動画配信について

大会当日の様子を東京都の公式 YouTube チャンネル【東京動画】で公開しています。
ぜひ、発表者の皆さんのスピーチを御覧ください！

配信ページＵＲＬ：

①【開会・挨拶】 https://tokyodouga.jp/zogns3acudk.html
②【発　　表】 https://tokyodouga.jp/6hfgruw9yp0.html
③【表　彰　式】 https://tokyodouga.jp/pb3eeo6tnto.html

① 開会・挨拶　② 発　表　③ 表彰式

編　集　後　記

今年度の中学生の主張東京都大会においても、社会における様々な課題に対して、中学生の皆さんが自分なりに考えを整理し、言葉にまとめ上げた作文が多数寄せられました。

大会当日の発表においては、発表者の皆さんが、しっかりと観客を見て、力を込めてスピーチをする姿が印象的でした。観客数が制限された中ではありましたが、動画配信用の撮影カメラも眼前にある中で、会場の舞台の上で堂々と発表される姿を前に、この文集用の写真撮影にも思わず力が入るシーンが多々ありました。

この文集の作成に当たって作文を確認していく中で、それぞれの文章を創り上げるために一人一人が一生懸命頭を悩ませ、試行錯誤を重ねられたかと思えば、編集に際しても身が引き締まる思いでした。1,600 字という限られた字数で自らの主張を展開し、文章にしたためる、また、聴衆を前に発表するということは、想像以上に難しいということを改めて感じました。

そうした努力の成果の一部を文集として広く公開するにあたり、応募された方々、大会に参加された方々及び御協力いただいた皆様に心より感謝を申し上げます。

東京都生活文化スポーツ局都民安全推進部若年支援課
「中学生の主張東京都大会」担当

閉　　会

発表者と審査員の皆さん

表 彰 式

表彰の様子

登録番号　4（60）

令和４年１１月発行

令和４年度　中学生の主張東京都大会　発表文集

編集・発行／東京都生活文化スポーツ局都民安全推進部若年支援課
〒 163-8001　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
都庁第一本庁舎 北塔３４階
電話（03）5388-3098

印刷／正和商事株式会社
〒 161-0032　東京都新宿区中落合一丁目６番８号
電話（03）3952-2154

本事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構より委託を受けて実施しております。

R60 古紙パルプ配合率60%再生紙を使用
VEGETABLE OIL INK
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。